

價值單位の研究 (二)

岩 井 茂

二 價值單位の貨幣的現象形態

a 價值單位の具體化としての貨幣

論理的に云つても歴史的に云つても、「價值單位」に關する凡べての思想は貨幣理論と關係を持つてゐる。又先きになしたように、價值單位の現象形態を分類するに當つてもこの單位と貨幣との關係が大切なものである。また此の關係を基として分類をするのは確實な仕方であり、殊に「貨幣の價值測定たる職能」をその出發點とするとき特にさうである。併し乍ら之とても十全なものではない。即ち先づ、澤山な中間現象を分類するには一覽表でも作つてそれに照し合せるようにもしなければならぬだらうし、又次には此様な分類の仕方では個々の現象がその屬してゐる範圍を乗り越えることがあるのを阻止することができないといふ缺點もある。

それはとに角この價值單位の貨幣的現象形態は、價值單位の活動範圍の大部分を占めてゐる。元來「觀念的な單位は貨幣を外にしては何等具體的な存在を有せず、従つて價值單位は必然的に貨幣記號の中に現はれる」⁽¹⁾ので

あるから、價值單位は否應なしに貨幣に代り、貨幣の任務を遂行するのである。だから正常な本位制度の下にあつては、「原則としてそれで以て一般的支拂手段の云ひ現はされるところの單位が同時に亦一般的計算單位として用ひられるのである」⁽²⁾。

(1) Nussbaum : Das Geld, S. 7.

(2) Moeller: Die Lehre vom Gelde, S. 142.

さて價值單位の貨幣的現象形態といふ中には、この單位が既存の本位制度と密接な關係を保つ場合、殊にその單位が具體化されて貨幣形態をとる場合が含まれてゐる。この貨幣的現象形態は「貨幣」制度の如何を問はないでどんな貨幣制度でも無條件に之を肯定する。それは貨幣制度が存立してゐなければ價值單位の根據がなくなつて仕舞ふからである。かくして凡ゆる種類の貨幣的現象形態を現存の貨幣の中に索めることは強ちできないことではない、只或る現象をこの貨幣的現象形態なりとなす爲には、價值單位が貨幣に對して確實な計量的關係を持つてゐることを必要とする。それはとに角この價值單位の貨幣的現象形態は具體的なものとして現はれることもあり又は單に抽象的なものとして現はれることもある、即ち之に二種あるわけである。

さて第一の部類の中では「價值の充實せる」鑄造貨幣が單位具體化の典型的なものである、何故かといへばこの場合には具體的な貨幣簡片が量的にも質的にもその單位を模範として作られるからである。素材測定制(金屬秤量制)といふのもこれに屬してゐる。貨幣價值を所謂「内部」價值から誘導するときには何時も貨幣單位と價值單位と

が内容上一致してゐるといふ考が含まれてゐるのである。この形態は原始的貨幣の中にも見られる。即ち有用貨幣 (Nutzgeld) といふのがそれで、この概念は貨幣として用ひられたものが、貨幣としての役目も果たし、又貨物としての役目をも果たすことを云ひ現はしてゐる。

b 観念的貨幣

次に價值單位の貨幣的現象形態にあつては大抵の場合に、貨幣の「素材的價值根據」が缺けてゐるのである。即ち所謂價值の充實してゐない、又は素材價值のない貨幣にあつては、その抽象的價值單位はその定義通りの形を具體的にとつてゐないものである。「實在的貨幣」(Monnaie réelle) と「観念的貨幣」(Monnaie ideale) との古い對立はこの價值の充實せる貨幣と然らざる貨幣との對立に適用することができる。「観念的貨幣は原則として價值の充實してゐない貨幣を指すのである。」⁽³³⁾

次の書参照

- (33) Montesquieu : *Esprit des lois*, 22, 2.
Walker : *Money*, 1873, p. 290ff.
Merriam, L. S. : *Standard of deferred payments*, in *Annals of American Academy*, II, p. 487.
Ravil : *Beitrage zur Lehre vom Gelde*, 1852, S. 40.

併し獨逸語の "ideal" といふ言葉と關連した貨幣論上の諸概念は曖昧で困るから、之を全然排した方がよい。佛

蘭西語では“*Monnaie ideale*”といふ言葉を轉用して、具體的な貨幣殊に價値の充實してゐない貨幣と、抽象的觀念との兩方を現はすようにしてゐる。

例へばガルニエは次の様に云つてゐる。「……觀念的貨幣即ち計算貨幣とは吾々がその度合を明かにせんと欲するものゝ價値を表現するものである……この計算貨幣は思想的なものといふよりも寧ろ具體的なものである」と。(4) この計算貨幣と現に流通せる貨幣との關係についてデュトオは次の様に云つてゐる。「實在的貨幣は金貨と

銀貨とである……取引や計算を容易にする爲に吾々は計算貨幣を案出した。それは佛蘭西ではリーブル(*livres*)とか、スウ(*sous*)とか、エキユウ(*écus*)と云ふようなものである。そしてこの最後に擧げた觀念的貨幣は、精密に云へば、所謂政治的貨幣(*Monnaie politique*)と云ふような實在的貨幣を可成多く含んだ集合名詞なのである」と。(5)

(4) Garnier : *Histoire de la monnaie*, I, 1819, S. 72, 77.

(5) Dutot : *Reflexions sur le commerce et les finances* (1735); Ed. Daire (1851), S. 895.

又この「觀念的」といふ言葉は、伊太利語などでは抽象的なものよりも、具體的な貨幣の價値の充實してゐないことを示すのに用ひられる。とに角價値單位の現象形態を論ずる場合には、この觀念的といふ言葉が抽象的な單位と「内部價値」のない貨幣との間の類似性を示してゐる限り、反つてその言葉の曖昧なことが面白い。就中金屬主義の貨幣本質觀ではこの兩者が非常に堅く結び付いてゐたものと見えて、この様な誤つた概念を構成する様になつたものであらう。

この「素材價值なき」交換手段といふ意味での「觀念的」貨幣は價值單位の具體化といふこと、素材測定的貨幣と同様に云ひ現はしてゐる。この理由によつてこの貨幣が價值單位の貨幣的現象形態、即ち單位具體化の凡べての場合を含んでゐるところの第一現象形態に屬するのである。不換紙幣、即ち決定的（暫行的、即ち兌換的に對する語）紙幣がこの適例である。又金核心本位（Goldkernwahrung）の下に於て發行された紙幣も亦之に屬する、何となればその價值單位は具體的に現はれることは現はれるが、その形式上、素材的に定義されないような形をとるからである。

さてこの貨幣的現象形態は貨幣がその職能を果たすすべての場合を包含するから、更に象徴貨幣として知られてゐる原始的貨幣をも擧げなければならぬ。ところがこの場合この貨幣の作用はその貨幣の商品的有效性から生ずるのではなく、有用貨幣とは無關係の象徴的な通用力を現はしてゐるのである。之についてはSchurtz, Ridgenay, Thielenusの勞作中に貴重な材料が充分に擧げられてゐるから、今この原始的記號貨幣の例を擧げるのは無駄なことである。

c 具體化されない價值單位

かくて價值單位が現行の貨幣制度と密接な計量的關係を保つてゐるような場合は全部之を價值單位の貨幣的現象形態といふことができる。此の間の事情は單位そのものが貨幣として具體化される場合に最もよく認められる。

併し尙この他に、或る單位が貨幣制度と密接な關係を保つてゐるといふ點には變りはないが、只それが具體的な形態をとらない場合がある。併しこの抽象的な單位でも之を價值單位の貨幣的現象形態と見ることができるのである。そこである單位が既存の本位制度に對しある計量的な關係を持して入つて來て、その單位がこの本位制度の範圍内で流通手段となり得たとするならば又一の貨幣的現象形態である。また斯くの如き現象形態は貨幣を否定するものではなく、寧ろ既存の本位制度を前提するものであるから、之を貨幣的現象形態と見るのは正しいのである。そこで具體的な貨幣單位に對する單なる綜合關係を云ひ現はしてゐるような架空的な單位も此の現象形態に屬する。

d 計 算 貨 幣

上述の如き單位を「計算貨幣」とか又は之に似寄つた様な誤つた名稱で呼ぶことがよくある。併しこの種の名稱は根本的に種類の異つた諸現象を混淆せるものであるから誤解を惹き起し易いのである。殊にこの概念では價值單位の貨幣的現象形態と貨幣代用的現象形態とを辨別することができないのである。また「計算貨幣」といふときにはいつも抽象的單位といふ意味に解されるが、併しこの兩者は全く別箇のものである。蓋し所謂計算貨幣の中には、日用語にははつきり現はれてゐないが、併し根本的に異つた二種類のものが存してゐる。第一種のもは現に流通せる鑄貨の倍數とか分數とかに對する名稱であるが、第二種のもは一定の金屬量に代るものなのであ

る。そして前者は價值單位の貨幣的現象形態に屬するが、反之後者は貨幣代用的現象形態に屬する、ところがこの兩者を「計算貨幣」といふ上位概念で纏めてしまふと上述の區別ができなくなつて仕舞ふのである。

クリンパルトは上記の二種の概念を明かに混同して次の様に云つてゐる。「價值單位として一國の貨幣制度の根底に横はる計算貨幣は、事實上鑄造されることもなく、又紙片の形をとつた價值記號とも代替されることなく従つて單なる假設的な又は觀念的な貨幣である」と。そしてその適例としてあまり少い爲に鑄造されないブラジルのレイといふ單位を擧げてゐる。(一レイは千分の一ミルレイにして、邦貨一厘九毛五糸餘に當る)

(6) Klimpert : Lexikon der Munzen, Masse und Gewichte; 2. Aufl., 1896, "Dealgeld", "Rechnungsgeld", "Fingierte "Munzen", "Rechnungsmunzen" の項參照

Jevons : Geld und Geldverkehr, S. 72. Money and the Mechanism of Exchange, p. 71. ユーナー大帝前のルー

ブルの例

Ludicke, J. A.: Vom dem Ursprung der Munzen, Coethen 1767-79, S. 111.

また獨逸のインフレーションの甚しかつた時には、箇々の價值單位が具體的に現象界に現はれなくなつて仕舞つたのである。之等の例に就いて見るに、何れにも共通なことは用ひられた單位が五感にふれ得る様な形をとつて未だ現はれて來ないか、又はもう現はれなくなつたといふことである。それかと云つてこの單位は適當な本位制度がなければ之を考へることはできないのである。かく單位が本位制度に依屬してゐるので之を價值單位の貨幣的現象形態の一となすことができるのである。

茲に述べた様に抽象的單位が一定の本位制度と計量的關係を保つて結合してゐるといふ意味での「計算貨幣」はその例に乏しくないのである、只その價值が大に失すとか又は少に過ぎるとかその他種々の理由で之が具體的に現はれないのである。

とに角抽象的單位が具體的な單位と密接に結び付いて用ひられてゐることは如何なる時代にも見られるのであるが、就中原始的時代によく見られる。「計算貨幣」といふ曖昧な概念の大部分を占めてゐる之等の單位は全部その本位制度と共に生滅する。かくの如き依屬關係の存することがこの單位が「價值單位の貨幣的現象形態」に屬する最良の證左であり、又それ故に貨幣代用的現象形態と對立をなすのである。

三 價值單位の貨幣代用的現象形態

a 貨幣代用的價值單位の本質

諸種の、價值單位の貨幣代用的現象形態は皆一樣に既存の貨幣制度に對立してゐる點に於いてその揆を一にしてゐる。そしてこの現象形態は或は改革的にか又は革命的に起るものである。之は現行の本位制度にあまり重い重荷を負はせすぎるところから生ずるのである。然らばそれはどういふ場合であるかといふに、通常、貨幣の價值保存職能に對する信頼に動搖を來したり、又は貨幣から派生し且流通場裡に於いて使用されるところの

單位がその本来持つてゐた内容を失ふといふ様な場合である。さてこの際幣制の改革を行ふのに必ずしも貨幣そのものを排除して仕舞はなくてもよいのであるが、併し新規のより良き價值單位を得たいといふ傾向があるため偶々上述した様な單位の具體化といふことが重大な意味を持たなくなるのである。そして只新規の抽象的單位が中心點に立つてゐるか否か、又自ら變化しないところの單位を求めてゐるか否かといふことを問題にするのである。かくしてこの貨幣代用的單位と通貨の中へ具體化された單位との區別はどうしても守らねばならぬので通常ゴツトル (Gottl) のなしてゐる様な支拂貨幣 (Zahlung) と計數貨幣 (Zählgeld) との區別を以て之に當てる。

本位制度が紊亂してゐる場合でも舊來の、貨幣の中へ具體化する單位が一気に、新規の抽象的な單位により排除されて仕舞ふといふ様なことはないから、この兩方の單位の共通的表示者が必要なわけである。それにはアモン (Amonn) のいふ様に「貨幣そのものが斯くの如き觀念的價值單位による價格表示をなせ」ばよいのである。

本位制度の改悪をするとき、殊にマアカンテリスの時代に於ては、本位金屬に混ぜ物をする事によつて之をなしたのであるから、この場合には一定の純分を持つた金屬の一定量を示す様な價值單位を新規に採用する様になる。だから貨幣代用的現象形態はよく金屬の分量によつて定義されるのである。又時としては一定の金屬量を單位として選定して之に獨立の名稱を與へることもある。又一定の貴金屬量に相當してゐる舊來の貨幣を計算上存続すれば態々新單位を創設する手數はゐらない。このことはモンローが稍詳細に述べてゐる。⁽⁷⁾

(7) Monroe, A. E.: Monetary theory before Adam Smith, Camb. 1923, pp. 133.

b 舊貨幣の名稱を存続せしめた場合

モンロオは主として伊太利の學者について「觀念的貨幣」の思想を探り、それ等の學者が皆次の様に説いてゐるといつてゐる。即ち觀念的貨幣が現はれること、換言すれば貨幣代用的單位を使用するのは、貨幣改鑄により生ずる不安を除去する爲に、銀の一定量を含んでゐた舊來の貨幣の名稱をそのまま計算上存続せしめたのに由るのであると。それ故モンロオの云ふ觀念的貨幣はある金屬量を現はす名稱に外ならない。併しその逆に凡べて舊い貨幣の名稱を存続せしめることは皆、貨幣代用といふ理由によるものだとはいへない。リツヂウエイはその例としてギニア、グロオト、スウ、ターラア(Guinea, Groat, Sow, Taler)といふ様な貨幣單位を擧げてゐる。現在でも尙用ひられてゐるターラアといふ概念は一の(名目的)集合名詞であつて、以前の様にターラアの中に具體化されてゐた一定分量の銀を指すものではない。

一定の金屬量をいひ現はすところの名稱、即ちこの金屬量を土臺とせる抽象的單位は計算貨幣の部類に屬する。先きにも計算貨幣のことを少しく説いたが、この計算貨幣といふ言語は一方では流通してゐる貨幣箇片の倍数又は分數を指し、従つて貨幣的價值單位たるの意味を有するが、他方では之で抽象的な金屬量をいひ現はし、従つて貨幣代用的現象ともなるものである。この後の場合にその單位が直接金屬の重量として定義されるとも又は間接に舊貨幣の名稱を存続使用するともそれはいづれでもよい。さてオツペンハイムはこの金屬的に定義された單

位を使用し得ることを考へてゐて、その單位を「計算貨幣」の概念の中へ入れてゐる。そして曰く「所謂計算貨幣は一部分この（流通せざる貨幣といふ）範疇に屬してゐる、それは鑄貨として存在しないで、只計算上使用する爲に觀念上考へられるにすぎないか、又は前には事實上存在してゐたが、もう永い間流通場裡から姿を消して仕舞つた様な貨幣單位がそれである」と。⁽⁸⁾

(8) Oppenheim : Die Natur des Geldes, S. 393.

又グラウマンは觀念的貨幣と計算貨幣とを同一視し、此の兩者を實在的貨幣に對立せしめてゐるし、⁽⁹⁾ジムメルは計算貨幣と金屬貨幣とを區別し、そして觀念的貨幣、理想的尺度、測定の本位、確實な觀念的尺度について論じてゐる。⁽¹⁰⁾

(9) Graumann, I. G., : Gesamnte Briefe von dem Gelde, 1762, S. 3.

(10) Simmel : Philosophie des Geldes, 1907, S. 182.

つづ moneta imaginaria, monnaie de compte, Rechnungsmünze, Rechnungsgeld. 及び之に類似の概念は、既存の貨幣制度に對立して起つて來た單位の特徴を云ひ現はすに適することもあるが、それ等の名稱の含んでゐる内容が極めて多岐多様であるから、かうした名稱は避けた方が便利である。⁽¹¹⁾

(11) Nussbaum : Das Geld, S. 93f.

c 計算貨幣と銀行貨幣

當然貨幣の諸職能をば並せ遂行せしむべきバンク貨幣(Bankogeld)のあつたことは別の金屬量で云ひ現はされ
た單位を世人が希求してゐたことよの證左ともなる。このバンク單位の有してゐた貨幣代用的な性質といふも
のは、その單位が單に概念的なものに止まるか又は鑄造されて、具體的な形をとるかによつて左右されるもの
ではない。かの最も有名な二つの銀行、即ちハンブルグ銀行と阿姆斯特ルダム銀行とはこの點に於てその撥を一に
してゐなかつたのである。それはとに角としてこのバンク貨幣は何時も計算貨幣といふ概念の中へ入れられてゐ
るのである。⁽¹²⁾

(12) Waser, I. H. : Abhandlung vom Geld, Zurich 1778, S. 63.

Mueller, Adam : Elemente der Staatskunst, S. 414.

Hufeland : Die Lehre vom Gelde, S. 35.

併しかくバンク貨幣を「計算貨幣」の部類に入れてもそれで先きに述べた概念上の不明瞭と曖昧さが氷解され
るものではない。それは種々の著者が夫々異つた概念内容を云ひ現はすのに同一の言葉を用ひてゐるからである。
例へばフリーフェレントがスチュアートの計算貨幣と名付けてゐるものは「貨幣でも何でもなく單なる支拂制度で
ある」といつてゐるのを見てもわかる。⁽¹³⁾併し之等の問題となつてゐる貨幣が何を意味してゐるかは、その概念内
容が貨幣代用的價值單位たる一定の金屬量であるか、又は貨幣單位の倍數又は分數を云ひ換へたものに過ぎない
かといふことが區別できれば、それで見通しがつくのである。

(2.) Hufeland : Die Lehre vom Gelde, S. 31.

d インフレーションの場合に於ける計算方法

インフレーションが起ると「價值單位の貨幣代用的現象形態」の部類に屬する澤山の計算方法が現はれる。この時には他の貨幣代用的現象形態に於けるよりも、計算單位と貨幣單位、計算貨幣と支拂貨幣との分裂が特に甚だしいインフレーションの場合には殆んど凡べての財が質的にも量的にも一義的に制限されるので、どの財も有效な價值單位たるの役目を果たし得る。斯くの如き事情の下にあつて獨逸では、貨幣代用的價值單位を樹立することが國家全體の爲に非常に賢明な策であることがわかつたから、充分な選擇をなすことができたのである。一定量の石炭、加里、裸麥又は純金などは最も廣く用ひられた單位である。併し此の種の單位は皆例外的にのみ最後の價格表示として取扱はれたことはその撥を一にする。「價值の變らない單位」による價格の表示をなすにはもう一度之を本位制度の單位に換算するのが普通である。殊に價格をとりきめてすぐそのときにその支拂をしなければならぬ様な場合にこのことが必要である。併し別箇の本位制度による「價值の變動しない支拂手段」を採用すればこうした手数は省けるわけである。

e 繰延支拂の標準

「繰延支拂の標準」(Standard of (for) deferred payments) とし、貨幣代用的單位は貨幣制度の或特殊の缺陷を

ほんとしたものである。この単位の根底には、貨幣單位は長期の契約の決済には用ひ難いものだといふ經驗が土臺となつて横つてゐる。フェツタアは之を定義して「繰延支拂とは以前に提供された財に對する契約履行の爲になされる支拂である」といつてゐる。⁽¹⁴⁾ところが一定量の貴金屬といふようなそれ自身變化しない單位でも時々長期の契約に用ひられ得ないことがある。そこで茲に何とかして變動しない購買力、出来るだけ「不變的、客觀的な交換價值」を持つたものを抽象的單位として選びたいといふ念願が生ずるのである。かういふ單位を發見したいと努力をしても容易く妙案が得られるものではない。そこで相對的貨幣價值を測定したり、一般的價格水準の變化を測定するには——殊にアングロサクソン文明に於て——舊來の標準が用ひられたのである、この「繰延支拂の標準」についてはラフリン、フィツシア、クラアク、又はニコルソンなどが實際的に且批評的に詳論を試みてゐる。この貨幣價值の變動を抑制しようとする場合に、舊來の提案の外に、限界效用の觀念を利用し之によつてある適當な單位を探索しようといふ説がある。即ちロスは次の様な提案をなしてゐる。即ち債務者は受取つた價值をば「客觀的效用によつて測定をなし」以て之が返濟をなすべく、「又産業の進歩に應じて、商品を受取るよりも少し餘計の客觀的效用を得られる様にすればよい」と。⁽¹⁵⁾併し今客觀的單位を得ようと努力してゐるのにかゝる主觀的要素を導入するのは價值單位の本來の意味に反する。全體としてみると、殊にアメリカの文献にあつても亦、「繰延支拂」に對して不動の購買力を保證してゐる様な單位があるかどうかといふことについては誰しも疑問に思つてゐる。そしてマアシャルが云つてゐる次の様な言が一般に信ぜられてゐるのである。曰く「理想的

に完全な、一般的購買力の單位は只得られないばかりではなく、考へることもできない」と。⁽¹⁶⁾

(14) Fetter, Fr. A. : Economic principles, 1926, p. 263.

(15) Ross : Annals of the American Academy, 1902, p. 334.

(16) Marshall : Money Credit and Commerce, 1923, p. 29.

f フイツシアの價値單位

諸種の、價値單位の貨幣代用的形態は抽象的に考へられ、且つ質的量的に改稱された財としての價値單位を破壊しようとはしない。然るに茲に一の例外がある、それはフィツシアの稱へるものである。⁽¹⁷⁾フィツシアの提稱する單位も他の貨幣代用的價値單位同様、貨幣價値の變動を抑制せんとするものであるが、この目的を達成するために新たな變動しない單位を創設し維持しようとするのではなく、それと反對の行き方をするのである。フィツシアは凡べての單位の持つてゐる質的量的の特徴を排除してしまつて、他の如何なる單位よりもより良く所期の目的を達すべき模範的單位を通用させようとする。そして彼は金を存続させるが、併し之を尊重する程度を變じたらばよいであらうと云ふ。⁽¹⁸⁾ところが斯く實行上の能否を考へない思想は凡ゆる價値單位を放棄することになる

(17) Fisher : Stabilizing the Dollar, 1920. 參照

(18) 此の點に關してはイテイマー Compensated dollar を云ふことを説いてゐる。Edie : Economics, p. 576.

また購買力にたより、之を土臺として有效な價値單位を定めようとする者は、誰しも一義的な單位を斷念して

しまふ。例へばキトスは次の様に云つてゐる。「観念的單位、即ちソヴァレン貨の購買力はその時架空的の市場を開く……………」そして「價值單位即ち購買力としての職能を營み得るものは金でもなく又その他の如何なる財でもない。一定財の購買力がかかる職能を營みうるのである……………」と。このキトスの考は飽迄空想的なものである、そして彼はこの價值單位を「富」の一部分と結び付けようとする。

(19) Kison, B. A. : *A Fraudulent Standard*, 1917, S. 136.

次にもう一つフィツシアが思ひ付いたが、併し實行できるものとは考へてゐなかつた思想がある、それは單位そのものを否定しないで、價值單位の問題を特別な方法で解決しようとするものである。即ち彼の「綜合的商品弗(單位)」といふ思想の中には、この價值單位は、假令内面的矛盾があつても、とに角財の分量によつてのみ定義することが出来るのだといふ考が含まれてゐる、ところがフィツシアはこの際一種の財の分量を以て定義せず、澤山の財(三百種)を以てし、全體の物價水準が一種の財の變動により左右されることのない様に計畫してゐる。此の價值單位は他の價值單位と原理上異つたものではない、それは多數の商品量を一の單位に綜合して下すところの定義にはその間に程度の差があるのでわかる。加之フィツシアの説く商品弗といふ單位は彼獨得のものではなく、價值單位の先貨幣的現象形態に於ても見られるものである。

g 「自然的」價值單位——勞働

「不自然的」標準たる貴金屬に對立してゐるものは「自然的」根據の上に立つた貨幣代用的單位である。この自然

に與へられたものを土臺とせる單位を發見しようといふ計畫をなすに當り色々のものが擧げられた、併しこの計畫にはいつも貨幣改革といふことが伴つてゐる。凡べての經濟行爲の無條件に必然的な前提をなすものは生産要素である、そこで自然的價值單位は土地とか勞働とか又は之から生じたものを以て之に充てる。この兩生産要素の中先づ勞働が第一に標準として現はれて來た。そしてこの勞働單位は他の「自然的」諸單位よりも詳細に（特に最近百年間に於て）論ぜられた。

この勞働單位は二つの根本的に異つた形態をとつて現はれ、且發達して來た。この對立を簡單に云ひ現はす爲に「本來の」勞働單位と「間接的」の勞働單位といふ名稱を用ひたがよいと思ふ。兩者の區別は兩單位が果たさんとする目的の中にもあり、又使用された單位の中にもある。さてこの直接本來の勞働單位は諸財に客觀的に「内在してゐる價值」を測定せんとするものであつて、財に投ぜられた勞働時間の長さによつてこの測定を達するのである。そこで此場合には價值の大小は勞働量により左右されるといふことが前提となつてゐる。併しこの思想にどんな缺陷があるかといふことは茲に論じない、そは茲では「單位」を選定することについてのみ論じてゐるからである。とに角この勞働單位に關する論争の結果、かゝる單位は得られないものだといふことが一般に認められた、それは「平均的勞働時間」といふ様な概念は到底不可能なものであるからである。また勞働單位には、どの價值單位にも必要とする質的、量的の一様性といふ様なものがない。そこで勞働・價值單位を實際上使用するわけには行かぬ、併し之とても所謂勞働の生産性 (Arbeitsproduktivität) を測定するといふ理論的な目的の爲に

は利用することができる。(20)

(20) Sombart: „Produktivität“ im „Weltwirtschaftliche Archiv“, 28, Bd, 1928, Heft 1, S.23.

次に間接的労働單位は貨幣價値の變動、即ち一般的物價水準の變化を表示し得る様な單位を見出さうとして生じたものである。併し労働そのもの、即ち價値を創造する要素としての労働を直接此の目的の爲に用ひることはできない、そこで之から派生した概念であるところの賃銀を以てする。そこで世人は例へば平均的な農業労働一時間に對する賃銀をこの單位としたらばよからうと考へる。この平均的労働賃銀と一般物價とは互に制約し合つてあまり變化しない關係を保つてゐるから、この労働單位が不變的な交換價値を體現してゐるものだといふ考も強ち間違ではない。併し良く考へてみると此の單位を用ひたらばよいといふことよりもどうして此の單位を正確に決めるかといふ困難の方が先に立つ。そして二つの異つた財に投ぜられた労働量を客觀的に比較對照することが困難であり、又或種の労働者は何時迄もその賃銀を得ることが出来ないことがある。それにも拘らず此の種の價値單位を或程度迄實際に使用し得ることは許さねばなるまい、そしてその適用範圍は直接的労働單位よりも多少廣いであらう。

h 價値單位としての土地

次に土地も亦「價値」を作り出すものであるといふ考から、之が労働と共に價値創造をなす程度を計數的に知ら

うとするに至つた。そこで事實上、生産要素たる土地を土臺として價值單位を設け様といふ提案が澤山ある。併し此の思想は何時も實用活と離れた空想となり、又得手勝手な想像に終つてゐる。土地——價值單位を説く人は何時も或一定の補助假定を設けなければならぬのである、即ち土地單位は常に勞働の價值尺度たる職能と結び付いてゐる。そして此の土地と勞働とをどうしても切り離すことができないといふことから、土地——價值單位を採用せんとする實際上の計畫が達成されないわけが説明できる。此の失敗は一方に於ては經驗的事實に基き、他方に於ては純論理的に説明さるべきものである。何となれば財の「内部價值」を測定すべき土地——單位を提稱する限りは、どうしてもこの「土地——價值單位」といふ概念を正確に定義しないでおくわけには行かない。然かも此の單位は他の「自然的」單位同様、その客觀的表徴を以てその輪畫を寫すことができないといふ運命を背負つてゐるからである。

併しかく勞働と結びつけても、土地の客觀的表徴の缺乏をどうすることもできないといふことは、土地と勞働とを土臺とする價值尺度を主張した最初の人ペティ (Petty, 1662) にあつて既に認められる。即ち彼はこの問題を解決しようとせず、勞働と土地との間に存する「自然の割合」(the natural ratio)を見出さうと努力した。併し彼には「價值」——觀念の統一性が缺けてゐたのでこの洞察をなすのが困難であつた。次にカンチロン (Cantillon, 1755) の説はペティのよりも稍明瞭である。彼は財の内部價值は勞働と土地とによつて決定されるものだといふ假定から出發して、この兩者の割合を見出し之を一つの分母の上へ持つて來ようとする。彼はその著 *Essai sur la nature*

du commerce en general¹⁾に於て、日傭人夫が或面積の土地に働いて生ぜしめた生産物によつて財の價值を云ひ現はさうとする。併しこの土地——單位をどう解すべきかといふことを説明してゐない。百年以上も経過してこの勞働と土地とを結び付けて尺度となさんとする企がエツフェルツ(Effertz, 1899)によつて再度なされた。即ち彼は本位制度をきめるに當り勞働と土地とを共に價值を創造するものとして同等に見ようとするのである。かゝる意見は社會主義者の「交換價值は使用勞働量に等し」といふ主張に反對する爲に起つたものとしての意義はあつても土地と勞働とに共通な分母を索めることはできなかつた。⁽²¹⁾ エツフェルツはこのことを認めて、兩者を統一的に數字で現はすことを斷念した。この彼獨得の、併し實行難を訴へるところの主張は、土地から收得した價值は之をそこに投ぜられた勞働に對し按分的に分配すべきものであるといふ思想に基いてゐるのである。

(21) テイツェルは土地を失ふことが、或人にまつて苦痛即ち費用と感ぜられる度合を、之を回收するのに要する勞働量に見積る(1896)により、自然費用を勞働費用に換算せんとする。 Dietzel: Theoretische Sozialökonomik, I., 1895, S. 265—269.

このエツフェルツの兩本位的な考により貨幣制度の根底にある價值單位と土地とがどうして結び付き得るか々わかる。このどうしても「價值單位の諸現象形態」と並べて説かなければならぬ思想も彼の專賣ではなく、その前例がある。即ちロオ(Loo)やフランクリン(Franklin)は土地を發行準備とした紙幣の存在し得るを信じてゐたのである。獨逸のレンテンマアク(Rentemark)はこの土地貨幣の主張の殿りをなしてゐる。このレンテンマアクで

もその他の銀行の計畫でも、價値單位を一定面積の土地によつて定義し、之を新單位として確立しようとするものではない。かくの如き制度を宣傳するときは何時も一種の不動産を發券準備とする考に戻つてくる。

併し此の考は、土地を土臺とした價値單位を得たいといふ本來の問題を逸してしまふ。従つて、之を解決することができないのである。かく考へて來ると一體土地からは何等の價値單位をも發見することができないといふことがわかる。とに角凡ゆる「自然的」尺度には共通な一つの性質がある様に思へる、それは之を價値單位となすに適しないか、或ひはある假定の下に於てのみそれができるといふことである。

i 價値尺度としての穀物及その他の土地產物

以上の如く從來人々は、あまり効果はなかつたがとに角、「自然的」價値單位を得る爲に生産要素たる勞働と土地とを利用した。併し「自然」に生成をなし、且つ人生に直接の關係を有する單位も又ある意味に於て自然的尺度となることがある。之については穀物が最も廣く行はれ且最も古い價値尺度である。古代バビロニアに既に例がある。リツヂウエイは價値單位の發生について穀物の重要だつたことを強調してゐる。數百年の間穀物は長期契約の價値單位として用ひられた、アダム・スミスも之が普及を證明してゐる。就中フィジオクラットの思想にはこの穀物の様な「自然的」尺度が應はしいのである。そこでコンデイヤツクやハツチエスンなども之を論じてゐる。

(22) Condillac : Le commerce et le Gouvernement, Chap. XXIII.

Hutcheson : Sittenlehre der Vernunft, Leipzig, 1756. S. 604, 603.

またアダム・スミス以後の時代に於ては佛蘭西にはセイ(Say)やシスモンディ(Sismond)あり、獨逸にはフィヒテ(Fichte)やゾーデン(Soden)やヘルマン(F. B. W. Hermann)等之が主張者であつた。

この穀物——價值單位は理論上二様の形をとつて現れる先づ第一には——原始状態では皆さうであつたが——穀物・單位を用ひて交換方程式を作るとき、その一方にこの單位が來るのであつて、その時は唯一の且つ究極の價格表示者たるの作用をする。第二には之に反して、此の單位が貨幣代用的價值單位たるの性質を持つときであつて、この場合には、この單位が最後の價格表示者ではなく、もう一度何か他のものに換算されるのである。之を貨幣價格計算の手段として利用し得ることはアモンなども認めてゐる。⁽²³⁾現代の經濟組織に於てかういふ風に穀物・單位を用ひるのならば、それは實行し得ることである。例へば獨逸のインフレーション時代に裸麥でその價值をいひ現はした有價證券などはこの穀物・單位を媒介者として用ひてゐるのである。經濟的動搖の高潮に達したとき(佛蘭西革命當時)には地租を穀物で定め、その時々相場之を換算した先例がある。之とても明かに價值單位の貨幣代用的現象形態の一つであり、計算の補助手段として用ひられたものであつて、究極の支拂高を表示するものではない。

(23) Ammon : Objekt und Grundbegriffe, S. 322.

其他の土地生産物の中、穀物と並んで貨幣代用的價值單位として用ひられたものに煙草がある。ラフリンは會々、英國では標準財としての職能と「交換の媒介」たるの職能とはそれ〴〵獨立に營まれることがあることを説いてゐる、即ち曰く「一六三三年の法律はその前書に於て、凡ゆる契約や計算を煙草するのが商慣習となつてゐることを述べてゐた………ところがその後の法律はこの煙草を契約上の法貨とさへもなした」と。⁽²⁴⁾

(24) Laughlin: Principles of money, 1903, S. 13.

直接土地から生じた生産物に價值測定の職能をさせることは困難ではない、依つて原始状態に於て既に自然の賜物は價值單位や貨幣と密接な關係を持つてゐたのである。そしてかゝる物を價值單位として利用しようといふ考は、人爲的な單位がその職能を果たさなくなつたときに特に現はれるのである。ところで先きに述べた「自然的」價值單位、即ち土地や勞働とはちがつて、この二つの生産要素から共同的に生産された産物は、之を客觀的數量的に測定することができるといふ利益がある、だから凡べての價值單位の持つべき根本的前提條件を備へてゐるのである。かういふわけで土地の産物が——最近數百年間原則として貨幣代用的——「自然的單位として用ひられたのである。此の場合單位として用ひられる土地の産物はどんな種類のものであつてもよい、だから數年前ロシアでクラシンKrasinが主張した様に鹽を價值單位とし、之を新本位制度の基礎に置くといふ考も穀物單位と同様貨幣代用的の性質を持つたものである。(未完)